

（薪神事）

夫、それ治おさまれる代よの声こゑは、安やすんじて以よて、樂たのしめこゑり。これまこと是誠まつりごとに、其その政事まつりごと和やはらげば也。天地あめつちを動うごかし、鬼人きじんを感かんぜしむ。二月きさらぎの、初申はつさるなれや、春日山かすがやま、峰響みねとよむ迄まで、頂いたゞき奉まつる、と詠ゑいぜしは、實じにも、故ゆへある道みちとかや。又二月きさらぎや、雪間ゆきまをにけし、春日野かすがのの、置おきく霜月しもつきも、神祭かみまつりの、今いまに絶たたえせぬは、國くに安樂あんらくの神慮しんりよ也。然しかれば、小忌衣みごろも、二月第二きさらぎだいの日ひ、

この宮寺に参勤し、□の歌を謡ふも、嘸御納受は  
あるらん。

上へ然れば、興福寺の、西金東金の両堂の法事にも、  
先づ、遊樂の舞歌を整へ、万歳を祈り奉り、國富と  
み、民も豊かなる、春を迎へて、年を積む、薪  
の神事、是なりや。されば、北野の天神も、名は、  
大唐に留まり、会は興福に納るとの御願文も、  
あらたにて、十二大会の初めにも、この遊樂を為  
す事の、当代の今に至る迄、目前、あらたなる、  
神道の末ぞ久しき。

これを見ん、残す金の、島千鳥、跡も朽ちせぬ、  
世々しるしに

永享八年二月日

沙弥 善芳

一体に、世の中がよく治まって居る聖代の歌謡は、民心が安らかで且つ樂しんでゐる心があらはれるものである。これ實に、其の政事が穏和に行はれて居ることに依るのである。従つて歌は、天地を動かし鬼神を感じしめるものだと言はれるのである。「きさらぎの初申はつさるなれや春日山、峰とよむまでいただきまつる」と詠じた歌は、まことに由緒深い神祭りの道を詠じた歌であるとかいふことである。又「きさらぎや雪間を分けし春日野

に置く霜月も神祭るなり」と詠まれた霜月の神祭が今も絶える事なく行はれるのは、国土安樂を御守護下さる神慮によるものである。それで、毎年二月の第二日に、此の宮寺へ参勤して、翁の歌を謡ふ法楽も、さぞかし御納受下さる事であらう。かやうなわけで、興福寺の西金堂と東金堂との両堂の御法会にも、先づ遊楽の舞歌を整へて、御代の万歳を祈り奉り、国土豊かに民も裕福な新春を迎へて、年を積むのであつて、薪の御神事と申すのも、これをいふのである。それで北野の天満天神の御願文にも、「名は大唐に聞へ、会は興福に留まる」と、あらたかに

仰せられ、興福寺の十二大会の最初に当つても、この遊楽を奏する事の、当代の今に至るまで絶える事のないのは、眼前にあらたかな神道の尊さであつて、行末も幾久しくさかえることであらう。

これを見ん、のこすこがねの島ちどり、跡もくちせぬ世々のしるしに。（書き残す所のこの謡は、佐渡の流人の筆の跡として、後世までも朽ちないしるしとして、人々は見ることであらう）

永享八年二月日

沙弥 善芳

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 下巻』能勢朝次 著